和棉の栽培からワークショップまでの多元的デザイン実践

なぜ／何をつくっているのかを２つの多元性概念から省察する

Plu-Design Practices of Japanese Cotton Workshops Starting from Cultivation: Reflecting why and what we are creating from the perspective of pluriversal/pluralistic design

二宮 咲子
Ninomiya Sakiko
関東学院大学 人間共生学部 共生デザイン学科

Abstract: The "Wawata Project" encompasses design practices and works initiated by the author. Reflecting on Pluriversal Design, the project prioritizes cultivating Wawata (Japanese cotton) itself to foster social and spiritual values over economic efficiency. This ontological approach aligns with Escobar (2018). Furthermore, workshops reveal that the project serves as "Plu-Design" practice: offering an alternative to unsustainable, profit-driven design (Pluriversal) while demonstrating how collaborative making discovers new, pluralistic values.

Key Word : Pluralistic Design, Pluriversal Design, Japanese Cotton

１．和棉で「何か」をつくるプロジェクトとは

１－１．概要

「和棉で『何か』をつくるプロジェクト」（以下、「和棉プロジェクト」）は筆者が発案者かつ実施責任者の教育・研究・生産・販売活動としてのデザイン実践とそれらの実践から生まれた作品群の総称である。表１に 2023 年度から 2025 年度までの「和棉プロジェクト」の概要を示す。

表１ 「和棉プロジェクト」（2023 年度～2025 年度）概要

年月日	名称	活動形態	活動内容
2023 年7月 22 日	夏の収穫体験イベント	大学正課の社会連携教育 A[注１]	・クイズ形式の教材制作と学習、綿花の収穫と綿繰り体験、和綿フエルトでランチベルトづくり
① 2023 年 11 月 8 日 ② 2024 年 2 月 29 日	秋の遠足	大学正課の社会連携教育 B[注２]	①綿花の収穫と綿繰り体験 ②イラスト集「めんかとわたしたちのだいぼうけん」制作と学習、綿花でクリスマス飾りづくり
① 2024 年 11 月 4 日 ② 2024 年 12 月 7 日	里山の自然と暮らし体験	大学正課の社会連携教育 A	①綿花の収穫・綿繰り体験、すごろく形式の教材制作と学習、綿花アート ②学習映像制作、和綿で三つ編みコースター又は手織りコースターづくり
2025 年 10 月 11 日	和棉で「何か」をつくるワークショップ	大学の個人研究[注３]	・和棉を用いて「何か」をつくる自由な創作活動と相互鑑賞

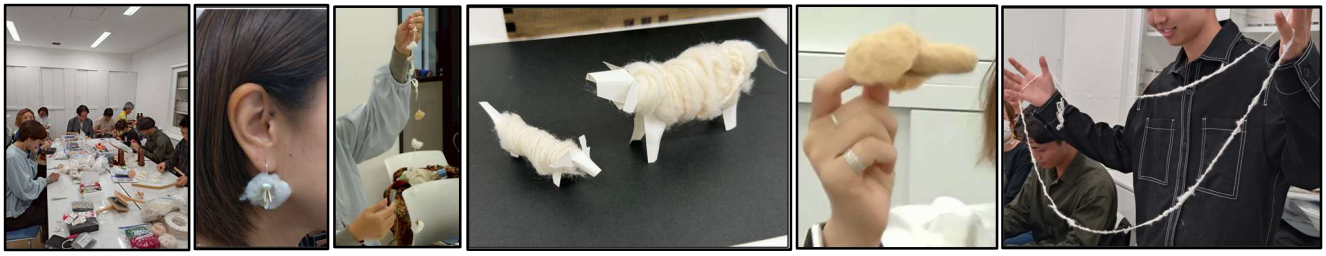
１－２．はじまり ：2020 年度～2021 年度

「和棉プロジェクト」のはじまりは筆者の家族である A 氏が 2020 年度から有機農業を開始したことに端を発する。A 氏は新規就農者であり、自分の有機農業の特色を示すために和棉に着目した。和棉のことを知るにつれて「日本に昔からある和棉を育てて種を繋いでいくことは農家の役割である」という考えに至り、筆者に「和棉を育ててみようと思うが和棉で何かできそうか」と相談をもちかけた[注４]。

筆者は A 氏からの相談で和棉の存在を初めて知り、まず画像をインターネットで検索した。第一印象としての見た目、特に綿花のふわふわした可愛らしさに強く惹かれた。続いて和棉の基本情報についてインターネットで検索した。すると、明治時代以降の繊維産業の機械化によって、繊維が短くて柔らかい和棉の綿花は機械製造に不向きであることから使用されなくなり、代わりに繊維が長くて強度があるインド綿等の洋綿が海外から大量に安く輸入されるようになったことや、かつては全国各地で栽培され、その土地の風土や気候にあった形質を受け継ぎ、何十種類もあった和棉が、現在の日本国内における統計上の生産量はゼロであり、和棉の種として購入可能な種類もほんの数種類となっていることがわかった。和棉のような１年草の栽培植物は、たった１年でも栽培しなくなってしまうと種は劣化し、発芽しなくなり、発芽しても弱いため病害虫による被害を受けやすくなる。このような和棉の現状は、生物多様性が種レベルで減少している環境問題といえる。環境社会学・倫理学を学んできた筆者は、綿花栽培や繊維産業に起因する世界規模の環境問題（例えば、人体や自然環境に有害な農薬類等の化学物質の大量使用や発展途上国における労働環境の劣悪さ）等のグローバルな環境問題と、日本国内で和棉が栽培されなくなったことの間にも繋がりがありそうだという直感をもった。さらには、和棉の利用法や商品等についてもインターネットで検索したが、2020 年 4 月当時には、先行する事例や参考となる情報を得ることはできなかった。

筆者は A 氏に「和棉で何ができるかわからないが可愛いし、何かができそう」と答えた。A 氏は「何をやるにしても和棉がないことには始まらないから育ててみよう」と答えた。2020 年 5 月に種を播き「和棉プロジェクト」が始まった。

© Copyright - JSSD73rd



２．なぜ、何をつくっているのか：２つの多元性概念からの省察

２－１．Pluriversal Design の視点から

「和綿プロジェクト」のはじまりにおけるＡ氏と筆者のそれぞれの和棉に対する思いを対象として、Pluriversal Design の視点から、なぜ、何をつくっているのかを省察した。

Ａ氏は有機農家としての特色を示す希少性と在来種の保存に繋がる点に和棉の価値をおいている。これは、繊維産業が機械化される過程において、和棉の綿花が機械による生産に適合せずに失った経済的な価値とは異なる価値である。前述の「日本に昔からある和棉を育てて、種を繋いでいくことは、農家の役割である」という Ａ氏の言葉からも、和棉に社会的な価値や精神的な価値といった、経済的な価値とは異なる価値があると考えて、和棉で何かをつくる前に、まず和棉そのものをつくっている。

筆者は和棉を有機的に栽培するという行為自体に環境問題を生み出さないオルタナティブな綿花栽培のあり方としての魅力を感じている。これは、Ａ氏と同様に経済的な価値ではなく、社会的な価値あるいは生態的な価値があると考えている。関心を寄せている環境問題の規模がグローバルな世界観と結びついている。これは、存在論的デザインにとっては、一元的な世界観（OWW: One-World World）に対抗して多元世界性（pluriversality）を希求する政治性を帯びることが極めて重要であるという Escobar, A.（2018）の主張と同一線上にある問題意識である。

２－２．Pluralistic Design の視点から

「和綿プロジェクト」の教育・研究活動への展開のなかから本稿では「和棉で『何か』をつくるワークショップ」（以下「和棉ＷＳ」）の実施内容を対象として、Pluralistic Design[注６]の視点から、なぜ、何をつくっているのかを省察した結果を示す。

表２　和棉ＷＳ概要

名称	和棉で「何か」をつくるワークショップ
実施日時	2025 年 10 月 11 日(土)10:00～15:00
実施場所	神奈川県茅ヶ崎市の北部丘陵地域
実施目的	和棉を用いた自由な創作活動を通じて和棉の新たな価値を発見する
主催者（１名）	二宮咲子（関東学院大学 人間共生学部共生デザイン学科 准教授）
参加者（10 名）	大学教員：4 名（デザイン１名、認知科学２名、アート１名） 大学生：3 名（デザイン３名） 個人：3 名（企業所属デザイナー1 名、フラワーアレンジメント講師 1 名、フードコーディネーター1 名）

午前中の「和棉ＷＳ」では初めて触れる和綿に戸惑い、既存の道具（綿繰り機・弓・コマ・簡易織り機等）の使い方を筆者に参加者が質問をする場面が多くみられた。和綿に慣れてきたころに昼食休憩となった。午後の再開時には 1 時間後に作品発表の時間を迎えることと、各自がつくる「何か」は自由であることだけを伝えた。参加者は筆者に質問等をすることはなくなり、つくることに没頭し、自身の創作活動について「楽しい」「わかった」「できた」という精神的な充足感を示す感情表現や、他の参加者の作品を見て「可愛い」「いいですね」等の感嘆の気持ちを表現する声が多くあがっていた。

多様な主体の協働的なつくる行為を通じて、紡績業の原材料のような経済的価値ではなく、詰め綿や衣服等のような道具的価値でもない、自由に「何か」をつくり「何か」を鑑賞しあうことで得られる精神的・社会的価値ともいえる新たな価値を参加者それぞれが見いだしていた。

３．再び、和棉で「何か」をつくるプロジェクトとは

筆者にとって「和棉プロジェクト」とは環境問題を生み出している経済効率偏重のデザインのあり方へのオルタナティブの提示（Pluriversal Design）であり、そして協働的なつくる行為を通じて新たな価値が発見される可能性の呈示（Pluralistic Design）でもある、多元的デザイン（Plu-Design）実践であった。

注および参考文献

１）関東学院大学人間共生学部３年生の専門（必修）科目「デザイン・プロジェクト 12（二宮）」
２）関東学院大学人間共生学部共生デザイン学科 3 年生の専門（登録必須）科目「ゼミナールⅡ（二宮）」及び４年生の専門（選択）科目「ゼミナールⅣ（二宮）」
３）研究分担者として 2024～2026 年度に参画している「コミュニティに『ローカルなデザイン』を醸成するためのデザイン実践と理論構築」（JSPS 科研費 JP24K15637）
４）Ａ氏への聞き取り調査（2025 年８月 12 日実施）より
５）Escobar, A. : Designs for the Pluriverse: Radical Interdependence, Autonomy, and the Making of Worlds, Duke University Press, 2018
６）筆者は二宮（2025）「『みかん米粉どら焼き』による多元的デザイン実践と教育」のなかで、多元的デザインの英語訳を Pluralistic Design とした。その理由として、多元的デザインの理論的基盤の源流を日本の環境社会学者や環境倫理研究者らによる順応的ガバナンスの研究領域に求めているからであり、前述の人類学や政治哲学で議論されてきた多元的世界観（Pluriverse）とは異なる多元性の概念であることがあげられる。順応的ガバナンスに基づいて多様な主体の価値観や目的をあえて一致させずに併存可能な状態を保つことを最も重視することが、多元的デザイン／Pluralistic Design の特徴である。

© Copyright - JSSD73rd